

I キャリア教育の新たな方向性

1 中教審答申（平成23年1月）が示した「キャリア教育」の定義

学校現場におけるキャリア教育の推進が求められ始めてから10年以上が経過し、キャリア教育の趣旨や意義を踏まえて各学校において工夫された取組が行われています。

そのような中、平成23年1月に公表された中教審答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」において、今後目指すべきキャリア教育の方向性が提示されました。そこでは、キャリア教育の定義として次のように示されています。

キャリア教育

一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育

また、同答申では、「キャリア」「キャリア発達」について次のように説明しています。

キャリア

人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割の関係を見いだしていく連なりや積み重ね

キャリア発達

社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程

2 「基礎的・汎用的能力」とは

これまで、児童生徒の職業観・勤労観を育む教育を推進するに当たり、求める力として「4領域8能力」が示されていましたが、これには次のような課題が指摘されていました。

- 対象が高等学校までの想定にとどまっており、生涯を通じて育成される能力という観点が薄い。
- 提示されている能力は例示にもかかわらず、学校現場で固定的にとらえられている場合が多い。
- 領域や能力の説明について十分な理解がされないまま、能力等の名称の語感や印象に依拠した実践が散見される。

そこで、分野や職種にかかわらず、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力として中教審答申に示されたものが、以下の4つの「基礎的・汎用的能力」です。

人間関係形成・社会形成能力

多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力

自己理解・自己管理能力

自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力

課題対応能力

仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力

キャリアプランニング能力

「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力

4つの「基礎的・汎用的能力」は、それぞれが独立したものではなく相互に関連・依存した関

係にあります。また、特に順序があるものではなく、これらの能力をすべての者が同じ程度あるいは均一に身に付けることを求めるものではありません。

これらの能力をどのようなまとまりで、どの程度身に付けさせるかは、学校や地域の特色、生徒の発達の段階によっても異なるため、各学校においては、この4つの「基礎的・汎用的能力」を参考にしつつ、それぞれの課題を踏まえて具体の能力を設定し、工夫された教育を行うことが求められています。その際、学習指導要領の内容を踏まえることも重要です。

3 キャリア教育を進めるに当たって

(1) キャリア教育の指導計画をつくる

生徒のキャリア発達を促すためには、必要とされる能力や態度を意図的・継続的に育成していくことが求められます。そのために、各学校はその特色や教育目標に基づいて教育課程にキャリア教育を明確に位置付けて実践することが必要です。

実践に当たって留意すべきことは、キャリア教育はすべての教科等の教育活動全体を通じて取り組むものであり、特定の活動のみを実施すればよいということや、新たな活動を単に追加すればよいということではありません。

学校のキャリア教育の取組状況を以下の「**P D C A**」でチェックしてみましょう。

Plan 目標の設定 指導計画の作成 指導計画の活用

Do 教育活動全体を通じた実践 体験的なキャリア教育の実践 家庭や地域社会との連携

Check 生徒の成長、変容の把握 実践の振り返りと検証 学校評価との関連

Action 指導計画の改善 校内研修の充実 校内組織の改善

今、既に各学校にある「キャリア教育」につながる「宝」を洗いだすことが、キャリア教育推進の第一歩であり、「キャリア教育の視点から教育活動を振り返る」ことが大切です。

そこから各学校の実態に応じたキャリア教育の目標が設定され、年間指導計画の策定につながっていきます。

(2) 「学習意欲」の向上につながるキャリア教育

キャリア教育では、卒業後の進路だけではなく、近い将来に加えて遠い将来のことも意識しながら、教え、導いていくことが求められています。

これは、平成24年に実施された「キャリア教育に関する全国調査」において、多くの児童生徒や保護者が望んでいることでもあります。

また、同調査からキャリア教育の充実度が高い学校ほど、生徒の学習意欲が高いという傾向があることが明らかになりました。キャリア教育を全校的に推進することによって、生徒の学習意欲の向上を図ることができるともいえます。

全校的にキャリア教育を推進するためには以下のような点に留意して取組を行うと効果的です。

- 担任の取組や指導を促し、キャリア教育の効果を高める全体計画の作成
- 職業への意識や日常生活での積極性を高める、キャリア教育に関わる体験活動の充実
- キャリア教育を適切に行う上で必要な指導力向上を目指す研修の充実
- 取組の実施にとどまらず、生徒の変化・変容を多面的にとらえる評価の実践
- 生徒が自らの意志と責任で自分を活かす進路選択ができるようにするための、個人またはグループ別に行う指導援助（キャリア・カウンセリング）の導入

特に「キャリア・カウンセリング」は、単に「卒業直後の進路決定のための相談（面談）」と
ならないよう、その趣旨を踏まえて行うことが重要です。

(3) キャリア教育の「評価」

キャリア教育を推進・充実させていく上で、評価はとても重要ですが、その実施に当たっては
次の2つの側面とその留意点を踏まえておく必要があります。

ア 「見取り」…生徒の現状や学びの成果を把握する側面

- 社会的・職業的自立に向けて身に付けさせたい力を明確にする
- 生徒の実態を踏まえた評価規準・指標を設定する
- 身に付けさせたい力を児童生徒と共有する

イ 「点検」…見取りの結果や全校的な教育活動の実施状況を把握する側面

- 組織の視点から、実践を継続的に進められる体制をつくる
- 指導計画の視点から、目標・計画・実施の一貫性を確認する
- 連携の視点から、キャリア教育の充実につながる人・組織との関係をつくる

「見取り」と「点検」を前述の「PDCA」に当てはめると、「見取り」はP→D→C→Pと
なるサイクル、「点検」はC→A→Pとなるサイクルと考えることができます。大切なのは「評
価（見取りと点検）」を行った後には必ず「P」に戻る、学校が目指した目標や計画の部分に立
ち返ることです。スタートとなる児童生徒に身に付けさせたい力を意識することが大切です。

(4) 中学校における進路指導・キャリア教育

中学校における進路指導は、生徒に自己の将来をみつめさせ、卒業後の進路選択を行うという
重要な活動です。本県で進めている「生き方指導としての進路指導」はキャリア教育の理念と通
じる部分が多くあります。

もちろん進路指導を行っているから、キャリア教育の取組はそれで十分であるということでは
ありません。進路指導はキャリア教育に包括されるもので、そして「進路指導はキャリア教育の
中核をなすもの」ということができます。

進路指導に当たっては、ガイダンス機能の充実を図るとともに、日ごろの学習指導、生徒指導、
教育相談を通して、キャリア教育の趣旨を踏まえて、生徒の能力・適性、興味・関心や将来の進
路希望等を的確に把握し、確かな生徒理解に基づき、一人一人の個性の伸長を図り、望ましい勤
労観・職業観を育成することが大切になります。

また、教育活動全体を通して、計画的・組織的かつ系統的に進路指導・キャリア教育を実施し、
中学校においては3年間を見通した継続的な指導・援助を行うことが重要です。さらに、キャリ
ア教育推進の視点から、小学校段階のキャリア教育の実態を踏まえ、中学校卒業後の生徒個々の
キャリア発達を想定した取組を行っていくことが、一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要
な基盤となる能力や態度を育てることにつながっていきます。

[参考資料]

国立教育政策研究所ホームページ内

生徒指導・進路指導研究センター

- 進路指導・キャリア教育の更なる充実のための実践に役立つ資料

(参照URL http://www.nier.go.jp/04_kenkyu_annai/div09-shido.html 平成28年3月現在)